第参拾壱番

十二ノ二

萬葉集巻第十二

古今相聞往來歌類下

正述心緒一百十首

柿本朝臣人麻呂十首

2841
我背子之朝明形吉不見今日間戀暮鴨
わかせこかあさけのすかたよくみすてけふのあひたをこひくらすかも

2842
我心等望使念新夜一夜不落夢見
わかこゝろとのみおもへハあらたよのひとよもおちすゆめにみえこそ

2843
與愛我念妹人皆如去見耶手不纒為
うるはしとわかおもふいもを人みなのいまゆきこゝろみてやてにまかすして

2844
比日寐之不寐敷細布手枕纒寐欲
このころハいのねられねハしきたへのたまくらまきてねまくほりせん

2845
忘哉語意遣雖過不過猶戀（忘哉イ忘哉わすれめや）
わすれやとものかたりてこゝろやりすくれとすきすなをこひしく

2846
夜不寐安不有白細布衣不脱及直相
よるもねすやすくもあらすしろたへのころもぬかしてたゝにあふまて

2847
後相吾莫戀妹雖云戀年經
のちもあはむわれにな恋ひそといもはいへとこふるあひたにとしはへにけり

2848
直不相有諸者夢谷何人言繁
たゝにあはすあるはうへなりゆめにたに
一云 うつゝにハうへもあはすてゆめにさへ

わかせこかあさけの姿
朝日影けのすかたを
いふハあさきたにわかるゝ
人の帰るをいふ也明なる
時に姿を見す
かくおきたる朝けの
姿をよくみすてけふ
一日こひくらすと也

わか心とのみ思へハ
我心のみ思ふをいふ
あらハ一夜もこゝろあれて
夢にみえよとねかふ也
一夜もこゝろにかけて
うれしとわかおもふ
うれしと我思ふさま

ふ妹を皆人の見れ
て今ゆきてみるを見め
やうにすると我ものに
えせしとの心

このころハいのねられね
ハいのねられぬに君かり
手枕まきてねまほし

ゆるしやとものかたりて
心やりハわすれもすへき
も是目の前に忘れて
こゝろやるとも猶わすれ
かたくいまにきこゆイわ

すれめやと言て
よるもねすやすくも
かいねすくハ男を
やすくもせすと

何事繁人
いふれこと多きけん
烏玉夜夢見継ぐ哉
うつゝにもあるものゆゑとつまじく
袖乾日無吾戀矣
神かとも日もさわりなくを
現直夢谷
うつゝもありすべたに
相見與我函
けるとよりうつゝ

作者未詳
我背子平且今待居介
且今跡
わりせこといまかくとまちをるに
夜更深去者嘆鶴鴨
れみゆはなけさつるも

玉釧宿妹妹有者許増
ふるまさやめるいとあるこゝろ
夜之長毛歡有倍吉
れあけもうる
人妻介言者誰事酢衣乃
ひとゆたにつゝそ衣の
此級解跡言者孰言
このひもとけとそ
即是許将戀物其跡知者
かりこいんおうと
其夜者由多介有益物平
うの夢をゆるのおもふ
逢已毛波思記許増
こゝろ
已余平欲
まのかいのちをなくおもれ
今生今将死与今妹常而
いまもいまとわれもとちんよわれも並すて
会逝玉妹毛堂
おもひなれいやすけくと

我背子之将来路語之夜者過去
わがせこがこんとのふしよはすぎぬ
思咲八更更思許理来目八面
もえやさらさらにこりこめやも
人言之讒ちこち平聞而玉鉾
ひとごとのよこすをきゝてもろ〳〵の
道毛不相常云吾妹子乎見渡左
みちもあはずもといふわぎもこを
不相解毛愈者弥益二
あへねもうこゝろなげいつやまに
人言繁所聞来可開
いこごともしげくきこしこんうも
里人毛謂告我称縦咲也思
さとびともいひつげくうねよしえゑやし
哉而毛將一死名惜乎我
こりこりもしなんなをおしめやも

慥使平無跡情平曽
うつのまにこゝろをなやましこゝろそう
使不遣之夢所見哉
けうりやゆめもとゝめぬよるやゆめ
天地不小至大夫跡
うめにちかすこゝろねまくをおとこと
思之吾耶雄心毛無
おもひしわれやおこゝろもなき
里近家哉應居此吾目之
さとちかくいへやはるけきわがめの
人目平爲乍戀繁口
ひとめをさしけくこひのしげきに
何時奈毛不忘見者紛有
いつごなもわすれずみればまぎれたる
得田直比来逸之
こゝろかもしけさし

我が背子が将来む路の夜は更けぬ
思ひ咲へ更に思ひ許り来む目八方
人言の讒ちこち平に聞きて玉鉾の
道も逢はずもと言ふ我妹子を
逢はねもうこゝろ嘆きいつやまに
人言の繁き所聞き来ば
いこごとも繁けくきこしこんうも
里人も謂ひ告げ我が称
縦咲へも思ひつげくうねよしえゑやし
哉而も將一死も名惜を我
こりこりもしなんなをおしめやも

うつのまにこゝろをなやましこゝろそう
使遣之夢所見哉
けうりやゆめもとゝめぬよるやゆめ
天地不小至大夫跡
うめにちかすこゝろねまくをおとこと
思之吾耶雄心毛無
おもひしわれやおこゝろもなき
里近家哉應居此吾目之
さとちかくいへやはるけきわがめの
人目平爲乍戀繁口
ひとめをさしけくこひのしげきに
何時奈毛不忘見者紛有
いつごなもわすれずみればまぎれたる
得田直比来逸之
こゝろかもしけさし

2885 2886 2887 2888 2889

2890 2891 2892 2893 2894

破而推而鉾心イ

人言子繁三言痛三我妹子二
去月従未相可聞
詩方毛曰管毛有鹿吾有者
地庭不レ落空消生
何
日之時
可毛吾妹子之
業引之容儀朝尓食余将見
不レ懸イ不ナシ将レ忘
言量欲
中ニ黙然毛有申尾小豆無
相見始而毛吾有戀香
吾妹子之咲眉引面影
懸而本名所念可毛
赤根指日之暮去者為便乎無三
千遍嘆而戀曽居
吾戀者夜晝不別百重成

ひきれすくに風流乃さまもいつ乃日いつの時
山寺を常ふるんとこ
ひとりおてこふれい
おふ法いうみでの松は
みでいふ人のうと
急ずし急て言ひやず
こうふさこういうりは
事れそうひく戀
て辛る学ましたる
そうわるをせうと我
こいさしてる学も
あるくよりずし
そぐてうんぢやく
すりき物をとこ
わさもこころえうひまん
付小鮎りは付ふ心

情之一念者甚はだ〳〵為便無
こゝろもとなくいぶせくおぼえ
五十殿す 太薄す肩根平徒
わづかにまくうすきまもあいねばいとうふ
今一撥 皆 不一相 人可毋
百重なる心一つにつゝとゝめたれば
癒々而後 裳 拘一相常名草 漏
くちおしくてのちもしばらくこゝろ
こゝのまくうすきもの
紫葉云 五十す手 有目 八面
こゝろもとなくいぶせくおぼえ
心四無 者
紫葉云 不生有 令 平癒管首
こゝろもとなくいぶせくおぼえ
幾
人 尓不一所知
吾者氣 樹
わすれがたきにしたしくおもひかはしたる人
他國尓 結婚尓行 而 太刀之緒毛
ひとのみやこにくだりて太刀のをもかへ
者。 尤夜曽明 衆流
来一解
てよりのちはいとゞこゝろもとなくいぶせくおぼえ
木 夫之 聡 神毛 今者 無
ほどもなくおのこもしにはてぬる

ひとのこゝろのよりてよりてと
よりそひ結婚と出女を
かりそめのこゝろにあくがれ
まそでこそまもれあくと
ますらおのこゝろやはこゝろ
恋のこゝろ男心うらみ
おやもこゝろをくだくらん
けねふくこゝろもいつ
こゝにありそもいつ
おくりよこにわすれ
おくりて京にねぬよりも
あきの人まつ夜こそ
こゝろもいたくなをこゝろ
心哉
人めもりつゝみやこうち
人めおもりてこゝろもち

癒之 奴 尓 吾者 可死
こゝろやつこなわれまさりて
常 者 辛苦 韜 毛
けねふくこゝろもいつ
心 安 目六 事 計 為與
こゝろやすめんことそうりせよ
凡 尓 之念 者人妻 尓
おおようにこれおもひ人にはた
有 云而 妹 尓癒 管 有 来也
おもふことをいもにこひつゝあるや
心 者 千重 百重 思有 行
こゝろうちつゝりてこゝろ
人目多手多見 妹 尓 不一相 可毋
いとめとおもふやいもにあはぬも
人目多手多見眼社 怒 禮 小 毛
人めおもりつゝみめこそ恋のまさりけれ
心 中 尓 吾 念 莫國
こゝろうちうちりわりおもへとも
人見而 事 宮目 不為 夢 尓 吾
ひとのそくことこゝろめでゝおもはれ

2916 2915 2914 2913

おほくハ心にかけすと
いとのみくるしきよめ
現にハ人のよりもまま
わりなくよめるなるを
いつまてにいかんいのちそ
ともにもさらぬ命と
あるハ益つつあらんする
より死ぬるかまされりと
一説益つつあられすんと
はねるかまさりけると
うつくしと思ふわきも
拾遺集にハうつしと妹を
あまり恋しさ
いもといはゝなめし
あへしハなめしとかき
さてなをも此かへしやる

今夜 将至 屋戸閉勿勤
こよひいたらんやどさすなゆめ

何時左右二 将生 命曽 凡者
いつまでにいかんいのちぞおほかたは
戀 乍 不有者 死 上有
こひつつあらずはしぬるまされり

愛 等 念 吾妹乎 夢見而
うつくしとおもふわぎもをゆめにみて
起 而 探 尓 無之 不怜
おきてさぐるになきがさぶしさ

妹 登 日 者 無礼 恐 然為蟹
いもといはばなめしかしこししかすがに
懸 巻 欲 言 尓 有 鴨
かけまくほしきことにあるかも

玉 勝 間 相 登 云 者 誰 有 香
たまかつまあはんといふはたれなるか
相 有 時 左 倍 面 隠 為
あへるときさへおもかくしする

こよむとあるを見安にはあまてこよむともよみしめてつらくとのふかくてまとあへ
てあらす一昔とこそとけり謂しや此哥は妹へとうつらしむなまよみて読るなるへし
るへし妹といはゝなめしといへは無礼り恐れり由てあることはすそにしひるをれるを
玉かつまあはんといふは 袖中抄に顕昭云玉かつまとは書をかゝせて見にこたへ
良玉集云 別仲述 玉かつま逢坂山のそれの木乃戸はをとゝあふさへそ人ふためぬる
此両首のうくハさも見へし万葉より今二首の哥を書きよめりける
見しね 玉かつま逢坂山の夕霧 玉かつまあふさかやまのやまのゆふぐれに此二
首をあけはいかにも流行しけるかの 略註 万葉玉かつまさしきにもふつり
るとつりかりあすかきくさへるくまなり 何しす 秘訣別に論
或説曰玉かつまハあるものの緒といふの上に出此緒乃結ひといへりなを
玉を結かくこといふへしは二首乃哥はいつれも結ひといふ字とよみ
いふへきなへし この哥はあはんといふことよめるは玉のをハおほかなる字を
取りけしむや 仙覚は玉かつまといふも勝間といひ 阿波國風土記云勝
間井ハ冷水出于此焉所以名勝間井者昔倭健天皇乃依大御櫛笥之忘而
勝間栗人者穿井故為名也ここ萬葉は説り見ひ又良安かにも玉勝間 玉
千けるハ櫛なるといふ也とあり櫛乃説は羽林家かふの歌にそてあり

2917 2918 2919 2920 2921 2922 2923 2924

よれるかに恋ふらん　世よかく恋乃ふれりんとも忘れて君とね
ぬるよしもかくかくさるかく小恋しりんと云りて一首は偏てもやととし
みどり子とすらり
思ひ妻にすらわめのと
よりて乳母のすくなき　万葉
面来とはおもきる心ある
心あるも我は離白く
いもあるまに乳のめ
やとい也嬰子(ミドリ)の守(モリ)
乳母求めやすく我と
迷ひけるの心
くやしくもそよ
求流乳母　童蒙抄六

2925
緑兒之為社乳母者求云
みどりこのためこそめのとはもとむといへ
乳飲哉君之於毛求覧
ちのめやきみがおもとむらん

2926
悔毛老尓来鴨我背子之
くやしくもおいにけるかも我せこが
求流乳母ニ行益物乎
もとむるめのとにゆかましものを

2927
浦觸而可例西袖叫又巻者
うらぶれてかれにし袖をまたまかば
過西戀也乱今可聞
すぎにしこひやみだれこんかも

ことしむるちしきに　祝ス同心なるへし我せこがめのとにもめのとゆえそ
さきるの悔しくも高すしに求むる時めのとはまさるりて来かや
しまたて見れわし　祇田枯果く思ひ絶えて又さわるき類ある

かへするとも袖をまくとまよめるを古今集りかそれ
袖をいさね枕をならすつてもあん独をねるはまやうに語る云只枕をする
心へん万葉枕ヲマクと読し
おのがじし人に
又妻云おのがじしその
生くと云心也　万葉　各
自恣とも云許の心
日毎に痩(ヤス)る人これ
ずおのがちに恋死
るんとかやと云よ
ゆふくまわち立待に
夕へ待てこずはうこと
く苦しかるとこそ
いけるよに恋てふ
恋に別し人はさも侍
らじ我は恋と云物

2928
各寺師人死為良思妹尓戀
おのがじしひとしにすらしいもにこひ
日異羸沼人不所知
ひにけにやせぬ人にしらせず

2929
夕々吾立待尓若雲
ゆふゆふにわがたちまつにけだしくも
君不来益者應辛苦
きみきまさずはくるしかるべし

2930
生代尓戀云物乎相不見者
いけるよにこひといふものをあひみねば
戀中尓毛吾曽苦寸
こひのうちにもわれぞくるしき

2931
念管座者苦毛夜干玉之
おもひつつをればくるしもぬばたまの
夜尓至者吾社湯亀
よるにいたらばわれこそゆかめ

2932 2933 2934 2935 2936 2937 2938 2939 2940

情庭燎而念抒空蟬之
こころをいふとして
人目を繁妹介不相
ひとめをしげみいもにあはずして
不相念公者雖座肩癒丹
あひおもはずきみは座ども片恋の
吾者衣癒君之光儀
わがこころくるしくきみのすがたを
味澤相目者非不飽
うちさらめやもあはずあけくも
不聞事毛苦勞有来
こととはぬもくるしくありこし
璞之年緒永何時左右鹿
あらたまの年のをながくいつまでか
我癒壽不知而
わがこひむいのちしらずして
将居
をらむ

今者吾者指南與我兄癒為者
いまはわれはしるべなんよわがせこひまれ
一夜一日毛毛無
ひとよひとひもなくすることも
白細布之袖折反癒者香
しろたへの袖折りかへしこひむれや
妹之容儀乃夢二四三湯流
いもがすがたのゆめにしみゆる
人言乎繁三毛人髮三我兄子乎
ひとごとをしげみこもりせこと
目者雖見相因毛無
めにはみれあふよしもなし
云云落車之雖比死
こひとつかうすることのくるしきに
我志不忘事志有者十方
わがこころわすれむことしあらば十方
中二死志
なかに死
入別
いるわかれ

万十二上 十一

念 八流跡 状 毛 我者 今者 無
おもひわすれんこと 妹 二 不一相 日 而 年之経 行者
日かず 吾 肖子亦 逗 祇 二四 有 四 小児 之
わがせこよ おもひあまりも 夜哭 平為 乍 宿ふ物 苦 之
よるもすがらも 我 傘之長 欲 家口 偽 平
わがかぶるもの 好 為人 平執 計
ながすまで人を 人言 繁 跡 妹 不一相
ひとごとをしげみ 情 裏 戀 北日
こころのうちもよこほれ 玉梓 玉鉾之 君之使 平待 之夜乃
まちかねし君がつかひを 名凝 其 今 毛 不一宿夜乃大寸
まちやかぬるも

他 ゆふつく 吾 ま 八一具 ふ 一云 ゆふつく 余 ま 待 つ 他
をまつとして 玉 鉾 之 道 介 行 相 而 外目 耳毛
ひとことをいはんとて 見者 吾 子 平 何時 鹿 將一待
まちかねしその使を 見 者 吾 子 平 何時 鹿 將一待
ゆふつくよ 一云 ゆふつく 余 ま 待 つ 他
ゆふつくよ 念 西 鹿 高 為 便 平 無 義
おもひのみ 吾 者 五十日 平 須 應 忌 屈 尾
わがこひてきたるを 門 出而 吾 反側 平 人
一云 ときいでて わがこひみすを 見 監 可毛
見るべくも 一云 すべもなくして 無之
行 家 當 見

柿本朝臣人麻呂歌集云 尓保鳥之奈津柴比來半人見
乃未馴者其門将去出而見與
明日者戀有容儀数
得田優異心欝悒事計
吉為吾兄子相有時谷
吾妹子之夜戸出乃光儀見而之從
情空有地者雖踐
おそねてよ我を起せと人の告こそ
海石榴市之八十衢尓立平之
吾歯之裏白細布之
袖乃狎尓思君平羅其念
戀君吾哭泣白妙之
神兼斯漬為便毛奈吉
従今者不相跡為也
我衣袖之干時毛奈吉
夢可登情班
干西君之事之通者

未玉之年月兼而爲玉乃
夢亦所見君之容儀者
從今者雖戀妹亦將相哉母
床邊不離夢所見
人目多見而言害目不爲夢谷
不止見與我戀將息
一云人目直者不相
現者言絶有夢谷
副而聚見與直相左右二

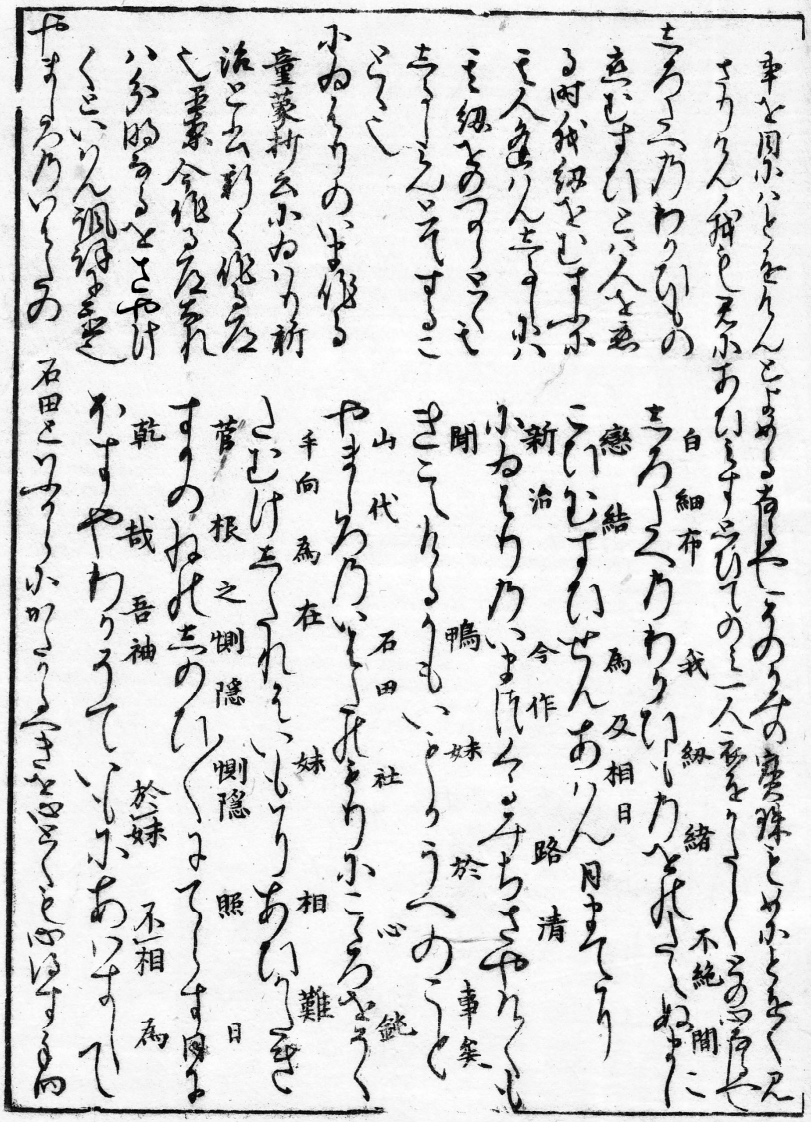
虛蟬之宇都思情毛吾者無
妹平不相見而手之經去者
虛蟬之常辭登雖念
而之聞者心遮焉
自妙之袖不數而爲玉之
今夜者早毛明將開
白細之手本寬久人之宿
味宿者不寐哉戀將度

寄物陳思（テニヲヒ）歌 一百五十首

柿本朝臣人麻呂 十三首

人所見 表 結 人不見
いとめおそうをむすびてゐのひるは
裏 級 開 戀 日 大
乃上なでもおもほえてゐ紐
ゆひてゐ人にあるみも
吾妹 繁 時 人言
あらなくも紐のごとる
友 有 裏 服 矣
ますらをにしもあもあ
真珠 眼 遠 兼 念
すのたわらせことをとく
一重 夫 一人 服 寐
こゝろのさけるひとことの
人言繁 吾妹
人にれすゐひいもんと
時 日 不絶 聞
あも見ゆてゐ紐とき

注死経の衣裏の寶珠も酔伏てえ入ねる



寄物陳思 衣単紐ホ
およせその意の歌
いとめおそうをむすひ
うつをむすひてゐ衣
乃上なてもおもほえ紐
ゆひてゐ人にあるみも
あらなくも紐のごとる
ますらをにしもあもあ
心緒及ゐもあ
すのたわらせことをとく
こゝろのさけるひとことの
人にれすゐひいもんと
あも見ゆてゐ紐とき

万十二 十五

寄物陳思歌 一百五十首

柿本朝臣人麻呂 十三首

人所見 表 結 人不見
いとめおそうをむすひてゐ衣
裏 級 開 戀 日 大
乃上なてもおもほえ紐
ゆひてゐ人にあるみも
吾妹 繁 時 人言
あらなくも紐のごとる
友 有 裏 服 矣
ますらをにしもあもあ
真珠 眼 遠 兼 念
すのたわらせことをとく
一重 夫 一人 服 寐
こゝろのさけるひとことの
人言繁 吾妹
人にれすゐひいもんと
時 日 不絶 聞
あも見ゆてゐ紐とき

注死経の衣裏の寶珠も酔伏てえ入ねる

事を見ゐとをろんとよめる意也 そのうちの寶珠とめをくえ
さうろん物也 えゐあひてのこ一人ゐをろ〳〵うの意
白細布 我 級 緒 不絶 聞に
戀結 為 及相日
こゐむすひてん あり 路 清
新 治 今作
小ねろのいまにみちさやろく
聞 妹 於 事矣
きこてろうもこゝろめこと
山代 石田 社
やまろのいさてをりふこそやしろ
千向 為 在 心 鉄
菅根之 惻隠 相 難
とむけ去てれそいもりあいてき
乾 哉 吾袖 妹 不相 為
すのねれ去のひくまてすほる
於妹 照 日
おすやわりてもふあいすの
石田とつろ小田とつろ小田とつろ
ゐきを心ろとのほする為

（前略）小妹（妹）あれこまそく神のこりふしみねとわりなさ（恋）
すうねれさのひくふ　苔乃根（恋）ふく根さすねれは再ひくと
いうん泥行うよりも再ひくふ神をうすこおいね潤乃ふまも
ふもうこいねね　わまこともまちんこ　我こにまこと
一説我妹うすこ　こまこせまこと
うすうりふくふ
あすうりふくふ
あもりけりこれ今
ふりいのねこにきり
れふれいねねうふく
えれ付とこきを
ちけきねふこと
ちつり川みちこ

（妹）戀　不知　渡　鴨
いくうさまこれわるるとこ
一云いをうよこそる小松のふを
惜人　尓者　不云　戀渡　小松名　鴨
おみ人まつくるるわるう
川　水陰　生　山草
やまのこうみけよねみる平ねすけの
不正　妹　所念
ふまもかおもりる
浅葉野　立　神古菅　根隠
うさこを野よこうみまこ愛ね隠れて
一云誰　葉野　尓　立　志奈比　舞
神古菅
誰　今こすけ
故　吾　不戀
これ沙うりのわうこいさこん
愛い清浄の苔も
後乃名ふも思い天乃こ愛こ神系ももうこい神古愛こ云こ
神杉神松おり杉山哥根くれてこいん序心ねくれて

（妹）戀　不知　渡　鴨
いくうさまこれわるるとこれわるるかも
一云いをうよこそる小松のふを
惜人　尓者　不云　戀渡　小松名　鴨
おみ人まつくるるわるう
川　水陰　生　山草
やまのこうみけよねみる平ねすけの
不正　妹　所念
ふまもかおもりる
浅葉野　立　神古菅　根隠
うさこを野よこうみまこ愛ね隠れて
一云誰　葉野　尓　立　志奈比　舞
神古菅
誰　今こすけ
故　吾　不戀
これ沙うりのわうこいさこん
愛い清浄の苔も
後乃名ふも思い天乃こ愛こ神系ももうこい神古愛こ云こ
神杉神松おり杉山哥根くれてこいん序心ねくれて

八鈎川お泊序（妹）
経すてきそ
うのうへまする小松
宝上乃小松ふを
ふ我名を惜そ
ふをいうさねうを
清る周詩乃六義乃
奥より自然と仰り
一云何か異我同
やま川乃みつばり
みけいふこのおこ
序ふ心
うさそ野よう今
愛い清浄の苔も
後乃名ふも思い天乃こ愛こ神系ももうこい神古愛こ云こ
神杉神松おり杉山哥根くれてこいん序心ねくれて

（妹）経　者　吾　與
妹　飛鳥川　高川　避　紫　越　来
うすうりふくふ
信　今夜　不明　行哉
ふりいのねこにきり
八鈎川　水底　不絶　水尾
やまの川みなるこいおけすゆめや
母　不絶　行　水　續
ふもーせとゆくうりのふきこそる
戀　是　比　歳
こるこのうこそを
儀　上　小松　生　惜
いうのうよおるこやうのふ名をおも

2971 2970 2968 2967 2966 2965 2964

ともゆ心ざしかる嗚遊
一云ゝゝも野木丼
かくのみありける
ゆめのくれゆゝけかく
みつ君をおもひて常ふ
思ひ添ゆすれくさひ
ありとゝ異本此哥心
下百卅七首白妙の袂
ゆさうく下小ち
つるはみのありせ乃
和名染色具云橡櫟
實也音皇蒙折云つる
ころ子とハ四條のこと
乃きぬを云故わましひめやもとよめり西東比哥わまし
しひめやといふん序哥と見ゆ君か心にそむねを我強てあはせんとそ
それなゆれうす深浅はといふん序哥之八ゐ浅くいふなるへき

作者未詳一百三十七首

如是耳　在家流君乎　衣尓有者　下毛将著跡　吾念有家留
かくのみにありける君を衣ならは下にもきんと我思へりける

橡之　袷衣　裏尓為者　吾将強八方　君之不来座
つるはみのあはせのきぬのうらにせはわれしひめやも君かきまさぬ

紅　薄染衣　浅尓　相見之人尓　戀比可聞
くれなゐのうすそめころもあさらかにあひ見し人にこふるころかも

と湊いふの須り世
らしのへハ見らてものへ
ゆりそ見えりて香ふ
おらし縫目衣有也
袖あかりよそての意
つるはみのひとへ乃
うらもなくの序意
あらそめ乃又安云
桃花染衣也
いはいかち志ら衣なりち
又同藍染乃布之ゆき
らの衣ハ浅きをいふ衣
おほきみのしほやく

年之経者　見管偲登　妹之言思　衣乃縫目　見者哀裳
としのへハ見つゝしのへといもかいひしきぬのぬいめを見れハかなしも

橡之　一重衣　裏毛無　将有兒故　戀渡可聞
つるはみのひとへころものうらもなくあるらんこゆへこひわたるかも

桃花褐　浅等乃衣　浅尓　念而　妹尓将相物香裳
あらそめのあさらのころもあさらかにおもひていもにあはんものかも

大王之　塩焼海部乃　藤衣　穢者雖為　弥希将見毛
おほきみのしほやくあまのふちころもなれはすれともいやめつらしも

又安云勅をかうむりて恒ゆきし也　西東日本紀八仲哀天皇
八年幸筑紫時罡縣主祖熊鰐聞天皇車駕参迎于周芳沙
麼之浦而獻魚塩地　又曰以逆見海為塩地　大王の塩焼といふを

こそ〳〵ゆくをいふ也 毎四上句の序と判くことあり
ゆつきぬのすそう 赤帛之純裏衣長。欲
仙すそう衣こゝに表も 我念君之不所見此鴨
裏もあき衣こゝれゝ
人のうるはれいも 真玉就乞兼而結
くるわゝこゝよ 言下所解日有来也
うるゝ見安云ほる 紫帯之結。毛解毛不見
すそう〳〵ことゝ 本名也妹尓戀度南
まゝ面ゝくゝもち花 高麗錦紐之結毛解不放
まゝ面ゝ序也 齋ゝいの而待杼騎無可開
緒かなきいものを
いん泥ゝ まきのゝ
直さ袋を巻て契て
むすひ〳〵紐をと
ひゝ乃きゝのおひゝ 袖中物ゝとも名ゝいふ也ゝ或人ゝ

心ゝとなゝとゝゝとゝ 重家嫁の室花要の裏
しゝゝすゝゝくゝうゝゝ
こまゝきひものゝすゝひも 玉藻絶心緒乃ひれ
ゆゝてもゝうまゝ 我下紐乃色尓不出
むゝきゝのわゝゝ 紫
一二句ゝゝゝ 戀可毛將渡相円平無堤
いん泥ゝ心消 こひうゝやせん 紐之結
まゝかゝゝゝ 何故可不思
ひものゝゝて 心尓八而戀布物乎
こゝれひもゝ 真十鏡見座吾背子
おれゝゝてゝ 拘持辰尓拘不相
ゐるひものゝ
まゝのゝすゝ
鏡をゝくゝき
うゝゝを神ゝ
ゝゝいゝん

真十鏡直目尓君平見者許猶
まゝうゝゝ

既 心 齒 因 尒思物乎
梓 弓 引 而不縦 大丈 哉
戀 言 物 平 悉 不得 伞
梓 弓 未 中 一伏三起 不通有之
君 者 會 奴 嗟 羽 將息也
今 更 何 牡鹿將念 梓 弓
引見 縦 見緣 西 畏 平
嫩嫺等之 績 麻之多田有打麻 懸
績 時 無 二 戀 度 鴨

馬醉蜂音名花蜘蛛 荒 鹿 異女二 不相 而
玉 手次 不懸 辛苦 懸禹 者
手見 巻之 欲寸 君可毛
緑色之 縵 花 八香尒
紫
今日見 尒 後將戀 鴨
人

序詩 仮合う今まで 夢とうむよ絡架
童蔓八重笥の話物 祈 祇点をとるも
の古兵と和のふ 古兵と男
こころ新兵へて
ちねかねの兵
ここに楽ま祇日
ゆこりつくも
ここ蠶の
北中小こりるいて
のまゆこりと持るい浦
ねいまきいけねいこ

（右）おくれたる心をいふ　（左）遅人を云　（右）なれなといはるゝも亦心
ひきれ（引）ゐの　（左）栗のいが（毬）　（右）紫絵（紫縮）中乃ふくろ　（左）ひなや（雛屋）乃ひな
ふくるこゝろ　（右）一説額をゆるつゝふくらすをいふ　（左）ふくれ
（右）玉鬘　不懸時　無戀　友
（左）何如　妹介　相時　毛名す
（右）相内之出来　左右者　疊　萬
（左）重　編　數　夢西　拇　見
（右）白　香付　木綿者花　物事　社者
（左）何時之　真枝　毛　常　不所志

童蒙抄云呉録地理志曰交趾定安縣有木綿樹林中有綿如蠶繭綿又可作布羅浮山記曰木綿正月則花大如芙蓉花落結子方生葉即子内布綿甚白蠶成熟而人以爲繭詞林采葉云云

（右）石上　振之　高橋　高介
（左）妹之持待　夜曽深去　家留
（右）湊入之　葬別　小舩　障　多
（左）今来　吾平　不遍跡　念　莫
（右）介　蘆別小
（左）湊　入
（右）障　君介　不相
（左）舩　多
（右）而　手　曽経　来